教育

edu@asahi.com

金曜～月曜掲載

知的障害の若者「大学」で青春

福祉事業組み合わせ 4年制の学び広がる

関心事を論文に■意欲増し生き生き

知的障害のある若者の学びを支える疑似的な「大学」の開設が相次いでいる。発達に寄り添い、時間をかけて学んでもらい、社会に送り出す。障害の有無にかかわらず青春を楽しみ、人生を考える時間を持ってほしいという、親や支援者の思いも後押しする。

福岡市東区の「カレッジ福岡」で13日、知的障害のある福岡県新宮町の男性(19)がパソコンに向かっていた。自らの関心に沿って調べ、論文を発表する「自主ゼミ」の時間だ。

男性はネットゲームをテーマに選んだ。「大好きなゲームのことを勉強できて楽しい。発表も頑張りたい」。担当の小谷彰さん(35)は「1、2年目は手助けが必要だが、4年目にもなると、一人でさくさくと仕上げますよ」。

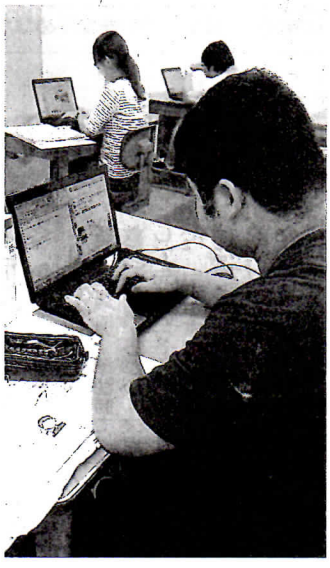
カレッジ福岡は、国の福祉制度を使って2012年にできた4年制の「福祉型大学」で、社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会（福岡県）が運営する。学位は得られないが、現在、特別支援学校高等部を卒業した知的障害者29人が「一般教養」「文化芸術」「スポーツ」など10教科を学んでいる。

同会の長谷川正人理事長(56)は、知的障害のある次女(26)が高等部を卒業する際、もっと経験を積ませたいと留年を提案した。だが、実現せず、次女は福祉事業所で働き始めた。「進学という進路がなく、高等部では就労を意識した教育に偏りがちだ。仲間と青春を楽しみ、時に悩み、成長する時間がもっと必要だと考えた」という。

高等部の卒業者の進学には現在、特別支援学校に設置された専攻科（2年）という選択肢がある。だが、特別支援教育に携わる研究者らでつくる「全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会」によると、知的障害が対象の専攻科があるのは全国で9校だけだ。

「もっと学ばせたい」と考える親は多く、近年は障害者総合支援法の自立訓練事業（2年間）を使って「福祉型専攻科」を設ける社会福祉法人が増えている。長谷川理事長は、これに就労移行支援事業（同）を組み合わせて4年制とすることを考えた。給付金が支給され、利用は原則無料だ。

理念は賛同を集め、15年までに長崎県大村市と東京都新宿区、北九州市、福岡県久留米市を含む5カ所に「カレッジ」が誕生した。



若者たちが自らの関心事について調べる「自主ゼミ」の時間。読めない漢字があったら教えるなど、先生は手伝い役に徹する＝13日、福岡市東区の「カレッジ福岡」、山下知子撮影

北九州市小倉北区の近藤和子さん(47)の長女、芹香さん(19)はカレッジ北九州の2年生。入学後は練習を重ねて一人で通学できるようになり、自信が生まれて合宿の支度も自分でやるなど意欲が増したという。和子さんは「生き生きとしている」と、娘の成長を感じている。

福岡女学院大の猪狩恵美子教授(特別支援教育)によると、高等部卒業後、職場の人間関係につまずいて離職する知的障害者が少なくない。「青年期にじっくりコミュニケーションスキルを磨き、失敗しても立ち直る経験を積ませるためには、『大学』のような時間が必要だ」と話す。

「進学の機会の平等 議論を」

同様の「大学」は他にも生まれている。

大津市の「くれおカレッジ」は14年に誕生し、36人が通う。「スクールきると」も14年、兵庫県伊丹市と大阪市の2カ所で「開学」し、78人が学ぶ。13年にできた名古屋市の「見晴台学園大学」は現職の大学教授らが授業を担い、単位制も導入する。

基本的にお金のかからない「福祉」の枠内ではなく、「教育」の中で位置づけるところもある。三重県四日市市の私立特別支援学校「聖母の家学園」は4月、専攻科を2年から4年にした。授業料は月1万5千円だ。

16年度の学校基本調査によると、高等部を卒業した知的障害者1万7754人のうち、専攻科や大学、短大などに進学したのは73人で進学率は0・4%。大学に限ると進学者は1人だった。一方、カレッジ福岡の長谷川理事長によると、アメリカや韓国などでは知的障害者に門戸を開く大学が増えているという。

日本が14年に批准した障害者権利条約には「締約国は、障害者が、差別なしに（中略）一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受できることを確保する」とある。見晴台学園大学の学長を務める田中良三・愛知県立大名誉教授(71)は「障害の有無にかかわらず、学ぶ思いがある人の進学機会の平等は保障されるべきだ。日本も議論する時に来ている」と話す。

（山下知子）

◆感想や、教育に関する情報をお寄せ下さい。edu@asahi.comまたはFAX03・3542・4855へ。

来週の 朝日小学生新聞

http://www.asagaku.com/

毎週月曜に掲載している「未来を見に行こう」では、最先端の科学技術の現場や、大人になった朝小の元読者の仕事場を訪ねています。24日は、世界初の月面探査レースに挑む日本チーム「ハクト」を紹介します。

ハクトは探査車を開発中で、12月にインドのロケットに載せて月面を目指す計画です。朝小の子ども記者2人は、探査車のボディーを製造した滋賀県の工場を見学し、ハクトを運営する宇宙ベンチャーの会社に、参加の目的や意気込みなどを聞きました。